
ブレイブルー 異伝、確立事象から外れた主人公

Nyarlathotep

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイブルー 異伝、確立事象から外れた主人公

【Nコード】

N2201P

【作者名】

Nyarlahotep

【あらすじ】

ブレイブルー 魔導書Xの主人公であるヴァイロンと、ブレイブルー 一つのアオのイザナギ改めフェウスが邂逅するお話。

ある日、ヴァイロンは咎追いの仕事である賞金首を見つける。正体不明の存在であり、巷で噂のラグナ・ザ・ブラッドエッジとも並べるといわれる程のS級賞金首……フェウスを。

取り合えずはここまで。進み次第、あらすじを更新させて貰います

ね

出会い

そこは、さながら隕石が降った跡地の様だった。黄色とオレンジのコントラストはまるで絵に描いた様に似合っていて、大地からは水が完全と言ってもいい程抜けていてひび割れを起こしている。素人目で見ても、植物を生やそうといった所で何をしようがその願いは不可能だとわかる位だ。

遠くに見える物は戦争でも使ったのかと言いたくなるような大きな丸いクレーターが見えていて、ここで何があつたのかを語りかけてくる錯覚に囚われる。

だが、そこには何も無い。生命の鼓動も、時の流れも無い。時間から切り離された様な場所にあるのは砂漠の様に広大な一面が広がる荒野。その荒野の枯れ木の枝に、一人の青年が腰掛けていた。男はそれを遠くから見つけると、青年へと足を進める。

ある程度まで行くと、目を伏せた青年が尋ねた。

「ねえ。君って誰？」

目を伏せていた青年は静かに目を開く。その視線の先には男がいた。だが、その問いに男は答えずに自らの一方的な意思を告げた。

「——お前がフェウスか？」

改造された白い統制機構の制服からポンチョにも似た物を羽織っていて、ズボンも上と同じく白で統一されている。

そんな全身白と言うやや奇怪な服装で身を包んだ男は目の前の人

物に刃のようなある意味清々しさを感じられる程真っ直ぐな敵意を向けていた。

やや白銀に近い白色の髪。冷静に目の前の敵を捉えている金色の目はまさしく狩人のそれと同じだ。

そして、何よりも目を引く物は腰にぶら下げている大型の銃だった。いや、その外見をただの“銃”一括りするのは些か気が引く。

見た目は大型のハンドガンと言う枠には収まらず、どちらかと言えばレールガンと言った大型の通常とは異なる弾丸を打ち出す物と言われた方が納得できる程だ。服装とは違い、黒いボディの銃の側面には、それぞれ白銀のクロスマークの様な物が描くような黄色い突起が付いている。

更に、銃口の僅かに下からは収納してもしきれない大型の刀身が僅かに顔を覗かせていて、町中で持っているだけでも間違いない危険物に指定されて捕まる程に危険さを醸し出していた。

青年は腰を掛けていた枝から飛び降りると、僅かに口元を釣らしながら獰猛な笑みを浮かべた。

「さあてね。ま、どうでもいいとは思わないかい？　そういう面白いの無いことはさ」

一方の青年は黼イタチのような鋭い目に、黒い髪は同じく獣のようだ。白色のシャツの上から羽と剣の装飾の施された黒いパーカーを羽織って、青いジーンズを履いている。首元にはパーカーと同じく剣と羽を模したネックレスが掛けられていた。

人を小馬鹿にした声を声帯に響かせながら、柔和な笑顔を男へと

向ける。その瞳には明らかな余裕が含まれていて、この状況を寧ろ楽しんでる様に見える。

「だが、そんな事はどうでもいい。お前の首を統制機構に持っていけばそれで済む話だ」

「まあ、いいけど。で、用件はやっぱり手配だよね？ って事は都咎追い……か。まあ、暇だし」

そう言つと一度溜息を漏らす青年。次の瞬間には何も握っていないかった筈の右腕には光を受けて、銀色に輝くナイフが握られていた。

「相手をしてあげようか？ 咎追いさん」

ナイフを男に突きつける青年。男は目を閉じたまま薄く笑つと腰にぶら下げたある巨大な銃剣を手にとって同じく青年へと突きつける。

「俺は最初からその気だ^{ハナ}」

「んじゃまあ、小手調べと行きますか」

右手に握っているナイフを男へと投降する。風を切り裂き、鎌鼬の伝承の様に風の刃を生み出しながらも突き進む銀色の閃光を男は銃で弾くと、銃を持っている腕を突き出して青年に照準を合わせる。

青年は横に軽くステップしながらも再び虚空よりナイフを取り出すと、それを両手に持って男へと走る。

上体を大地と密着しているのでは無いかと錯覚させる程に地面ス

レスレで走る青年を男は冷静に射撃する。

白銀と黄金の閃光が黒い銃身を通り、青年の体を貫こうと接近する。だが、それは青年には当らずにレスレの所で回避されてしまう。

「ちょこまかと!!」

「褒めてくれてありがとう、ね!!」

声と共に両手に持ったナイフを何故か男の首の左右へと投降する。男は飛来するナイフを視界の隅にいれながらも、何も無い空間が光を反射している事に疑問を抱く。

(……なんだ? ……ッ!? この光り方はまさかッ!?)

男はそれを弾くのでは無く、後ろに下がりながら上体を下げる事で回避する。

それを見た青年は一度走るのを止めて、まるで子供を褒める大人のような口ぶりで褒めた。

「へえ? 中々目がいいんだね」

「まさか……ワイヤーか!?!」

ワイヤーで繋がれたナイフとナイフが通り過ぎれば、ワイヤーはまるで刃となったかのように男の首を飛ばしていただろう。男はそれに冷や汗を流しながらも、目の前の敵は強いと再確認し、改めて

銃口を青年へと向ける。

「大当たり〜！！ 商品として……白銀^{ナイフ}の雨を降らせましょう！！」

青年は一飛びで十メートル程軽々と飛んで見せると、両手の指と指の間に挟んだナイフを男へと投げる。

ブンッ！！ と、風を切る音と共に白銀の雨に相応しい量のナイフが男へと迫る。その速さは明らかに先ほどのそれよりも加速していた。

（最初は遊びだって言うのか！？ ……チィッ！！）

男は内心毒づきながらも、銃を青年へと向ける。あのナイフの一本一本を捌くのは不可能だと感じたからだ。

（この雨を全て防ぐなんて無理だ。なら……一撃で決めるッ！！）

男は自らの銃に力を込める。そして、両手で銃を構えると引き金を引いた。

瞬間、大気の震えと共に世界が揺れた。否、そう思わせる力が世界に轟いた。激しい衝撃で男の体が地面を削り取りながら後退する。^{おおよ}凡そ五メートル程後ろに下がった所で衝撃が止んだ。

そして、弾丸はさながら“光”の様に……白銀の雨を全て蹴散らして青年を呑み込んだ。

出会い（後書き）

どうも、前作である一つアオを見た人はお久しぶりです。
今作から読む人は始めまして。

トッシーさんから来た人は同士よ。

てな訳で、始めさせて貰いました。理由は、元々ブレイブルーの二次創作が少なかったので、トッシーさんのを読ませて頂いて。

「中々独特な設定だな」

と思ったので、聞いてみたらオツケを貰いましたwww

改悪にならないようにがんばります！！ 後、誤字脱字は言うてくれると助かります。

原因

「……へえ？ 中々やるんだね」

「嘘……だろ……？」

感心した様な声色が満身創痕のヴァイロンに届く。そのあどけなさを残した子供の様な声は忘れもしない。先程の青年の物だ。だが、なぜ生きている？ 自分は最強の咎追いだ。先程の一撃は間違いなく体毎全てを消してしまう程の威力だった。なのになぜ？ その疑問に答える者は誰一人としていない。だが、驚きに揺れる瞳をあざけ笑つかの様に痛い位の殺意がヴァイロンを襲う。

藍色の風が吹いた。砂煙が一瞬にして晴れる。その中から現れた青年の姿は無傷とは行かないものの、大きな傷は無い。だが、青年の体からは藍色のオーラの様な物が溢れていた。不透明なその色は……ヴァイロンを光に例えるなら、正に闇に相応しい。全ての色を混ぜ合わせ、更にそれを無理に藍色にした様な闇をその身に纏いながら青年は獰猛な笑みを浮かべる。

——ヤバイ。

ヴァイロンは銃口を向けると狂った様に連射をする。流星の様に打ち出された弾丸は青年を貫く。鮮血が辺りに飛び散る。体に風穴が開き、内臓が辺りに撒けられた。——にも関わらずに。

その表情は笑みを浮かべていた。深い深い……憎しみと喜びの入れ混じった笑みを。

「なんだ……お前は一体なんなんだ！？」

ヴァイロンは本能的に叫ぶ。恐怖に閉ざされた心を無理矢理呼び覚まし、自身の持つ力の発動の宣言を。

銃に腕を翳し、叫ぶ様に告げる。全ての運命を蹂躪し、可能性すらも否定し尽くす絶対的な力を。

「第666キサナ機関解放、次元干涉虚数方陣展開！！」

「第666拘束機関解放、次元干涉虚数方陣展開！！」
コードエックス
「魔導書X、起動！！」

次の瞬間、ヴァイロンの武器の突起が開きクロスを描く突起から魔法陣が出現する。そこに秘められた力は絶対的な希望、正義、光。全ての可能性の意味を蹂躪する力が解き放たれた。だが、そんな淡い希望すらも絶望は許さない。

「コードS・E・C！！」
ソウル エタニテグライ
「プレイブル藍の魔導書」——つて、嘘？ ここまで来て命令来ちゃう？」

辺りに漂っていた闇が収縮される。それに伴い、青年が孕んでいる狂気も無くなっていた。

一瞬前の光景が嘘のよう。だが、その過去は間違いなく存在していて、その残骸を大地が物語っている。

それでも、嘘だと言えは納得してしまうような現実。ここまで世界はあやふやなのかとヴァイロンは考える。

だが、それに答えは無い。なぜなら、世界すらもその返答に困るからだ。

「悪いけど俺はこの辺で退散するよ。じゃあね、ヴァイロン」

清々しいとは言えない苦い笑い。先程とは違う、悪そうに笑って見せたその表情には多少の申し訳なさが見て取れた。

ヴァイロンは当然それに驚きの表情を表す。そして、腕を伸ばしながら叫んだ。

「なっ！！ おい！！」

「俺を追うならカグツチに来なよ。——『輝』」

最後に呟いた言葉は先程の人間らしさは無い。機械的な声が響く。それを聞いてヴァイロンは友人から聞いた話を思い出す。

世界最高額の賞金首にして、死神の異名を持つ悪魔。

『ラグナ・ザ・ブラッドエッジがカグツチにいる』、と。

原因（後書き）

遅くて短い。最悪、ですかね。まあ、プロローグ程度と許して貰えれば幸いです。

カグツチ（前）

全身を改造された当制服で包んだ金髪の男、ヴァイロンは第十三階層都市であるカグツチの最下層にいた。

辺りは太陽の光が遮られてしまっていてとても薄暗く、横を見てみれば恐らくは上層から投げられたゴミのような物が見て取れる。俗に言うスラムのようだ。

階層都市の名の通り、階毎にある物が分かれていて、上に行くにつれ高貴の身分や統制機構の衛士達が増えてくる。この最下層には主に猫の亜住民族であるカカ族と呼ばれる者達が暮らしていた。

つまり、人間であるヴァイロンの姿はここでは非常に目立つ。確かに、元々全身を原型が無いとはいえ統制機構の制服で包み、大きな銃をブラ下げていれば危険人として非常に目立つのだが。

（久しぶりのカグツチ、だな）

統制機構の衛視である以上、本部が置かれている場所であるカグツチには何度か足を運んだ。彼自身、以前はこの部隊に所属して戦闘を行っていた。

だが、ここへは昔を懐かしむために着た訳ではない。自信が追っていた、かのSS級の賞金首であるラグナ・ザ・ブラッドエッジと同格の賞金首だった謎の青年。その謎の青年が最後に残っていた言葉……『俺を追いたければカグツチに来い』という謎の言葉。

それを確かめる為にこの場所へと戻ったのだ。

（それにしても、実際見てみると最下層の有様ってのは……酷いな）
彼自身、統制機構の衛士時代に最下層の話は幾つか耳にしていた。ありもしないような世迷いごとで彩られ、化け物の住む地だと言われた物だ。

だが、実際見てみればそれは違々と断言できる。まだ子供しか見えないとはいえ、子供たちの笑顔は本物だった。この薄暗い世界を楽しそうに駆け回っている。その光景が微笑ましかったのか、ヴ

アイロンは僅かに笑顔を浮かべた。その笑顔に気づいたように子供たちが駆け寄ってくる。

（そういえば、来たのはいいがどうやって上に行けるんだ……？）
当然、統制機構では最下層に来る自体を想像していない為、この手の話はされていない。故に、現地住民の話が必要不可欠である。ならば、目の前に現れた力力族の子供たちというのは言い方が悪いが非常に都合のいい存在だ。見返りを求められていても、自分は賞金首を追う咎追い。金銭面でも多少の額はある。

「あそぼー！！」

黄色いコートで全身を包み、顔の部分はポツカリと穴が開いているかのように暗く、肌該当する部分は見れない。その中で、やけにコミカルな印象の赤い瞳といかにも何でも食べますといった口元が印象的だ。成程、確かに人と比べれば違いすぎるとヴァイロンは僅かにため息を吐いた。

（つか、ここじゃあ赤の他人に遊びの話を押しかけていいのかよ……）

常識的にどうか、などと下らないことを考えている内にわらわらと子供たちが楽しそうにヴァイロンの周りを取り囲む。これだけ楽しそうに笑顔を見せ付けられてしまえば、取るべき道は恐らく一つだろう。

（相手をする程暇じゃないしな。……これならいけるか）

「じゃあ、鬼ごっこだ。鬼は俺。それでいいか？」

「……わっ！ 逃げろー！！」

子供達が逃げていく姿を薄く笑いながら確認すると、ヴァイロンは足を進める。こんな所で遊ぶ必要は無いのだ。確かに人間として褒められた行為ではないが、仕方ないといえば仕方ないだろう。

「ごめんなさいね。あの子達と付き合わせてしまった」

後ろから、申し訳なさそうな女性の声がした。

ヴァイロンは後ろを振り向く。最初に抱いたのはこんな所に人間がいたかという驚愕。次になぜここにいるかということだ。統制機

構の衛士はまずここへは来ないし、わざわざここに来る一般人も物好きだ。そして、身に纏っている服はチャイナドレスのようなあくまでも動きやすそうな服を選んでいる。

黒い髪を結び、その絹のような髪を腰まで伸ばして、なぜか髪の上には手乗りサイズのパンダが満足そうに座っている。顔は全体的に女性的で、大人の女性の包装力を感じる。クッキリとした目元にスラリとした鼻。薄くピンク色に彩られた唇は僅かに輝いているように見えた。

「いや、別にそんなことはどうでもいいいわ。所で、上の階への行き方ってわかるか？」

「上の階……？　というか、何で下の階に？」

「なんでって、他に入り口が無いから……」

「え？　普通にあるわよ？」

「……マジ？」

統制機構が使うポートのようなもののほかに民間人が使用することの出来るものも当然存在していた。ただしそれは予約制であるし、金銭面においてもあまり優しいものでもない。結果だけ見れば、得をしたのはヴァロンの方だろう。

「……知らなかったのね。ま、あの子達に付き合わせてしまったお礼よ。付いてきて」

「お、おお」

一瞬哀れむような目で見られたせいか、ヴァイロンの顔が僅かに桜色になっている。羞恥心でも抱いたのだろうか。それにしても、見れば見るほどこの場に不釣り合いだと疑問を抱く。

外見が相当な美人であるからか、着ている服も高価なものかと錯覚してしまう。そんな人間がなぜ最下層にいるのか？

「なあ。なんであんたは最下層にいるんだ？」

「私？　あの子達といるのが楽しいからよ」

「……なるほどな」

小難しい理由はいらない。隠したいことがあれば隠せば良いし、

それを無理に聞き出すのも後味が悪い。それに、その言葉には頷けた。無邪気な子供達の笑顔を見てみると、こつちまでもが遊びたくなるような感覚に囚われる。そういう意味では先程の子供達には悪いことをしたとヴァイロンは一足遅く罪悪感を抱いた。

「ここよ」

見れば、これだけ汚れた町に不釣り合いに清潔なエレベーターがあった。銀色のドアは、そこだけ異質な空間。階層ごとに世界が違うと言われて納得しそうになるほどの現実味の無さ。それほどまでに膨大な違和感を纏っていた。だが、ヴァイロンの予想とは違う。通常、階層ごとの移動などは番人がいてもおかしくは無いのだろうか？

「番人とかはいないのか？」

「ええ。上にいるわ。油断した所をズドン！！……まあ、私がいるから平気でしょう」

指を銃の形にして、ヴァイロンに突きつけた。成程、油断した所を突くという形なのかとヴァイロンは納得する。だが、それと同時に物騒だとも感じた。統制機構の本部があるだけで、ここまで物騒な町へと変貌するものなのか？

「偉いこと物騒なんだな。この町は」

「ええ……何せ、あのラグナザ・ブラッドエッジがいるんだから」「ラグナ……か」

あの謎の青年が言っていたことと関係があるのか？ 当然答えは返ってこない。

だが、無関係かと聞かれればあまりにも出来すぎてる。いずれにせよ、どちらかに接触を行うことが重要だ。

「そつえば、アンタ。名前は？」

「私？ ライチよ。これでも医者をやってるわ」

「医者……ねえ」

ある意味ピッタリだ。包装力のあるこの笑顔で言い寄られてしまえば、流石のヴァイロンでも恐らくは渋々治療を受けてしまう。何より、先程困り果てているヴァイロンを自ら進んで助けるというこ

とはかなりのお人よしだ。悩みも纏めて聞いてくれる気がするなど、密かにヴァイロンは考える。

「お似合いだな」

「ありがとう」

はにかむようにライチが笑顔を見せると、それに伴うかのようにエレベーターが到着した。エレベーターの中は特別普通で、人が10人入れば重量オーバーで動かなくなりそうだ。ライチとヴァイロンは中に入り、ライチは中と書かれたボタンを押して閉と書かれたボタンを押す。すると、ゆっくりとエレベーターが上に上がり始めた。

「……」

「……」

が、両者共に沈黙。話す内容は確かにないし、つい先程出会ったのだから当然といえば当然だろう。だからとはいえ、この状況をどうすればいいのだろうか。

「……なあ。下層の人間にとって……統制機構は『悪』か？」

「『悪』？」

「ああ。俺は昔、統制機構にいた。そして今、下層を見て思った。まるで役に立ってないんじゃないかねえかってさ」

「難しいわね。けど、『悪』とか『善』とかそんな曖昧なものに縛られる必要があるの？」

「どういうことだ？」

「私はね。医者だからっていうのもあるけど、誰かを救いたい。それが世間から見ても『悪人』でもね。」

けど、その人が『悪』かどうかは私が決める。……私はそれでいいと思う」

僅かに影を含んだ笑顔。その笑顔の理由をヴァイロンは知らない。だが、ヴァイロンは笑う。目の前にいる人物は本当の意味で医者だと確信しながら。

「……ありがとう。なんとなくわかったわ」

「いえいえ。さ、もうすぐ着くわよ」

エレベーターが然程大きな音を立てずに静かに止まる。その後、無機質なアナウンス音と共にゆっくりと扉が開いた。

あのスラムのような町から一変した光景。まるで繁華街のように賑わった人々が目に映った。笑顔に満ち溢れ、全体的に陽気な空気がヴァイロンを包み込む。その人々の中にはチラホラと明らかに人間離れた者も見受けられる。

（カグツチ……懐かしいな）

久しぶりに見た光景に、ヴァイロンは僅かに笑う。だが、次の瞬間には咎追いらしい獰猛な笑みを浮かべていた。

「サンキュウな」

「ええ。それじゃあね」

ライチは片手を挙げると人込みの中に消えていった。それを見届け、ヴァイロンも足を進める。

「やあ。本当に来るとは俺も予想外だったよ」

人込みの中に紛れ込んでいたのか、それともどこからともなく現れたのか。神出鬼没を体言したような現れ方にヴァイロンは僅かに舌打ちをする。その表情を見た瞬間、青年は面白そうにほくそ笑んだが。

やがて、人を不快にさせ、嘲笑するような表情を顔に貼り付けた青年はヴァイロンを見据える。

だが、瞳の奥底は笑っているようには見えない。戦闘の際には見せなかった冷徹な色が僅かに顔を覗かせていたからだ。

ヴァイロンは僅かに考える。自分との戦闘であれだけ遊んでいるように見えた瞳が今ではまるで笑っていない。ならば、これは自分との戦闘よりも危険な事なのかと。

「……お望み通り着てやったぞ」

「見たらわかるよ。それじゃあ、とりあえず統制機構の支部に行こうか」

「……なんでだ？」

「おお、怖い怖い。そんな顔はしないでよ、俺のガラスのハートが壊れちゃうよ？」

「デメエー!!」

腰にぶら提げてある大型の銃剣を一瞬で右腕に掲げ、斧で薪を割るかのように一撃を放った。

本来なら時間のかかる筈のそれを一瞬で行い、明確な必殺を軽々と振るうその姿は最強の咎追いを冠するのに相応しい。

だが、青年はつまらなそうに銃剣が振り落とされる瞬間、銃剣を持つ手首を蹴り上げると、怯んだ一瞬の隙について両腕でヴァイロンの手から銃剣を奪った。

単純な力比べだ。だが、その際に見れた力は明らかに人を大きく超えている。現に、近くにいる住民たちは目の前で起きたことが夢のように見えているだろう。

「――焦るなよ、雑魚が。俺だつてここで君に死なれちゃ困るんだよ。それにしても……これ、魔道書なんだ」

新しい玩具を子供のように面白そうに銃剣を振るう。確かに、彼にとって『魔道書』程度の物は遊び道具にしかない。振るわれた銃剣はブォン!! と、空気を切り裂く。その音を満足気に響かせながら誰もいない空間へと言葉を投げる。

「レイチエル。いる？」

次の瞬間、空間が割れた。黒と青が混ざったような不思議な空間から現れたブロンドの少女。

黒いレオタードや競泳水着のような服の上からアーマーのような物を纏っていると言うのは傍から見てもかなりおかしい。

だが、その姿はそれだけでは無い程に奇怪だ。目にはバイザーをつけていて、服装もスーツの上からアーマーでもつけたかと思う程の重装備。極めつけに周りに剣のようなパーツが無数に飛行していた。見た瞬間に思い浮かんだ単語は兵器。それ以上に単語は浮かんでこなかった。どれだけ頭が搜索しようが、他に表すべき物が無いからだ。

（なんだ……！？）

ヴァイロンとて、様々なものを見てきた。出来損ないの生物兵器人食い植物。建物を押しつぶす虫。

だが、これはその中のどれにも属していない。当然だ。これはそもそも存在すら許されていないモノなのだから。

青年はあの笑顔を完全に止め、突如として現れた謎の少女を見る。嫌悪感に満ちた瞳は見ただけで何が言いたいかがよくわかる。

「……呼んだ覚えは無いよ。それと、もし俺の邪魔をするって言うんなら——」

ポケットから鈍く光るナイフを取り出す。主なナイフの使用用途である切断用の形ではなく、刺す事に特化した作り。俗に言うスパイク型と呼ばれる形状で、主に銃の先端上に使われている刃だ。

それを謎の少女に向け、ねっとりとした視線を向けて笑う。

「——逆鋼鉄の処女してやるよ。マゼガキ」
アイアンメイデン

獲物を求め、飢えた狼のような瞳。獣らしい獰猛な笑みを浮かべ、目の前の相手をただ殺す為に体を切り替える。

『……おい、お前。そこにいる奴に抱かれる』

脳内に文字では無く声として干渉してくる謎の声の主はそれだけ言っとプツツリと途切れてしまった。その言葉を聴いた青年は懐かしそうに笑う。

「……ココノエか。いいよ、けどまあ俺はそういうのは馴れてるから。未体験の少年に先を譲るよ」

「はあ！？ お、おい！！」

「男に二言は無いよ。無論、俺もね。さあ、蟲惑的な快樂の海なかへご招待だ」

それだけ言うと、一瞬でヴァイロンの背後に回る。その後、強化した脚を用いた強烈な蹴りを背後から穿った。内臓や骨を傷つけないように気遣われてはいるが、それだけだ。人間如きの貧弱な肉体ではその衝撃を完全に逃がす事は出来ない。

結果ヴァイロンは謎の少年にガツチリと足を絡まれ、背中に腕を

回され……まるでカップルが激しく愛し合うような姿勢となった。

「あゝ……まだ昼間だよ？ ヴァイロン。それと、まさかの野外プレイを所望とは、君も図太いんだね」

「な、な、な、な！？」

全身を茹でたタコのように真っ赤に染めながら、ヴァイロンと謎の少女は消える。残された青年は近くに集まってきた野次馬を尻目にもう一つの目的を果たしに行く。

ラグナⅡザ・ブラッドエッジとの接触。そして、ノエルⅡヴァーミリオンの消去。

それこそが、青年の目的だった。

カグツチ（前）（後書き）

一月以上更新できなかったとは……その割りにこの量。
申し訳ありません。キッチンと三日以内には更新します。ではでは

カグツチ（中）

碧生^{みどり}い茂る白い宮殿。柔らかい太陽の日差しを受け、草花が伸び伸びとしている。木々は一つのアクセントのように控え目になっていて、宮殿の相まってかまるで童話のワンシーンのようだ。

緑色の体毛を生やした動物が視界の隅で動き回る。それを不思議そうに眺めながらも、青年はゆったりとした歩調で歩む。

すると、目の前に自身が探していると思われる人物が歩いていった。脳内にあるイメージとも合致する。青年は僅かに歩調を速め、目前にいる人物に追い付くと声を掛けた。

「……君、ノエル・ヴァーミリオン少尉、だよな？」

「え？ ああ、はい」

「よかった。人違いだったら、恥ずかしくて死んでいる所だった」
青年は目の前にいる女性に笑いながら話す。

金髪のプロンドに統制機構の青い制服。華奢な体つきだが、女性用ベレー帽を被っているところから立派な軍人だと考えられる。

身長は低く、スラリとした体つき。グラマーと言うよりは、もっとシャープな印象を受ける。

「……えっと。何か用件があるんですか？ あ、ラグナ・ザブラッドエッジについての情報は教えてあげられませんか？」

「いい心遣いだ。うん、偉い偉い。けどまあ、ごめんね？ これもまた仕事なんだ」

うんうんと一人合点しながら頷く。だが、それでノエルの気が晴れる訳ではない。僅かに頬を膨らませ、子供のような反応をしながらすねたように言う。

「一人で勝手に納得しないでください。……それで、一体なんなんですか？」

「まあ、かつたるいから単刀直入に。悪いけど死んでくれる？ 『蒼』の少女。君は迷惑なんだ。俺じゃなくて、俺の上司のね」

「え……？」

目の前で突然死ねと言われたノエルは目を点のようにしていた。だが、ノエルはその理由を推測した。

ハザマ大尉。目の前の青年に負けず劣らず謎に満ちた存在。もしもハザマの仕業だとするのなら、可能性はゼロではない。結局あの時はうやむやになってはいたが、あの存在は異質だったからだ。

だが、ここで死ぬ訳にはいかない。なぜなら、自分にはまだやることが残っているからだ。親友を助けなくてはならない。

「そーいう訳だから。まあ、ちょっととは足掻いてよ。——女子供に手を上げるのはあまり好きじゃなくてね。正当防衛なら多少は罪悪感が薄れるでしょ？」

それだけ言うと、殺意が全く籠っていないナイフを投擲する。

それをノエルは身を屈めて回避する。そして、両腕には銀とも白ともつかない巨大な二丁の銃を取り出した。

肌を痺れさせるような強烈な威圧感。間違いなく、伝説級の兵器……アークエネミーの内の一つだ。

そして、数あるアークエネミーの中で銃型の物はただ一つ。魔銃・ヴェルヴェルク。座標を無視して担い手が着弾点を決められる伝説の銃。

明らかに的外れな方向に銃身が向いていながらもノエルは引き金を引く。すると、銃特有の火薬の音はせずに、黄色い魔方陣のようなものが青年の立っている所に現れた。部位は両脚部。殺さずに行動不能にさせるつもりだろう。

咄嗟の攻撃に対し、ここまで冷静な対応は賞賛に値する。だが、青年とはいえ潜っていた場数は通常の人間とは比べ物にならない。

即座に足を後ろではなく前方へ踏み出す。左足から踏み込み、術式によるブーストの効いた右足で大きく跳躍した。右足で踏んだ花と土が舞い上がる。その不安定な体制のまま術式によってナイフを生成。それを銀色の雨と直喩できる速度で投擲する。

ガガガッ！！と、幾つものナイフが地面に突き刺さり土煙が

上がる。だが、ノエルはそれを青年と同じく前方に動くことによって回避する。通常、空中で体制を整えるのは不可能だ。そして、万物は全て重力に作用される。ゆえにノエルは青年がいる僅か下に座標を設定して引き金を引いた。

青年は咄嗟に体をズラす。だが、左足が丁度膝辺りに掠ってしまふ。それだけで、膝より下が弾け飛んだ。赤い血が草花を潤し、白と赤の混ざった骨が肥料のように砕かれて降り注ぐ。

——僅かに掠ってこれか。腐ってもアークエネミーだね。

青年が痛みに顔を歪めている内にノエルは同じく術式で強化した両足で跳躍した。そして、右腕に握ったヴェルヴェルクで青年の顔を狙って振りぬいた。

ドゴッ！！と、音を立てながら青年の顔が横から受けた衝撃で歪み、きりもみ回転しながら四、五メートル程吹き飛ぶ。

そして、ノエルは空中で青年の着地点を目で追う。脳内でシミレーションし、場所を特定。そして、その場所に狙いを定めると着弾点に無数の銃弾を放った。

黄色い術式が大地を砕く。爆音が響き、血が飛び散り骨が砕ける。赤色の混ざった土煙が上がり、青年の姿が視認不可能になるほどバラバラとなる。

ノエルは着地し、あれだけやれば生きていないと判断すると宮殿の方へと足を踏み出す。その表情はまるで無感情を貼り付けたように能面で、ヴェルヴェルクで殴った時の返り血が頬についた血が機械らしさを生み出している。

その一連の流れは、まさに芸術。恐らく、そのワンシーンを切り取ればそれだけで殺人を芸術へと昇華した圧倒的な世界を目に付けることが出来るだろう。それは天才と謳われたジン・キサラギのように美しい殺害ではなく、対象を確実に殺し尽くす為にのみ特化した機械のみがなせる業。

やがて土煙が止み、ノエルは無表情のまま歩いている所に銀色の流星が空気を裂いた。

それはノエルの背中を露出した特長的な制服の背中に突き刺さり、そこから赤色の液体が白い肌を赤く染めてゆく。

「くっ……」

痛みからか、膝をついたノエルはすぐさま背中にあるナイフを抜いた。幸い傷は浅く、あまり酷くない。出血こそしているが、それもたいしたことは無い。だが、止血をしなければ今後の戦闘に関わる。自身の制服の袖を破り、傷口を強く縛りつけようとする。

「ブラボー！！ オーブラボー！！ 美しい！！ 今まで数ある事
肉体をぶっ殺されてきたけど、これだけ綺麗に殺されたのは初めて
だ！！ これじゃあ殺されたこっちも拍手とため息しか出ないよ！
！ いやゝ素晴らしい！！」

「……え？」

「え？ って、何そんな呆けた声を出してるの？ 上司に習わなかった？ 殺した相手はキチンと肉片になったのを確認死なさい！！
……ってさ」

先ほど殺したはずの青年が心から嬉しそうに笑いながら叫ぶ。確かに、服装は既に原型を留めてはいない。いや、そんなことはどうだっていい。間違いなく肉片に変えたはずだ。完璧だった。ヴェルヴェルクが命ずるがままにやらせた。なのになぜ？ なぜあの青年は五体満足で生きている？

「嘘…… どうして……？」

「どうして？ 答えは簡単。俺、人間じゃないから。ああ、だから
ってココノエの所のお人形さんと一緒にしないでね？」

「だからって……」

「なんだ。思ったより面倒なんだね、君は。……昔の人はいいま
した。やられたらやり返せ、ってね。あれだけ綺麗で素敵で愉快にブ
チ殺されたんだ。——君にもやってあげるよ」

瞬間、ノエルに電流が走った。

いや、それは比喻でしかない。だが、間違いなく電流が走った。
脊髄が焦げる匂いがした。脳内が固まる感触を感じた。体が凍りつ

く音を聞いた。体が言うことを聞かない。それは、一切の思考を許さない絶対強者のみが浮かべる笑み。

見た者を絶望に叩き落すような笑み。相手を破壊しようと、犬歯を見せて下品な笑みを見せる青年を前にノエルは死を覚悟した。

青年はその破壊的な笑みを浮かべながら足を進める。

「……何やってやがる？ テメエは」

全身から怒りを滲み出しながら全身白づくめで金髪の男……ヴァイロンはそれだけ言うのと腰に掛けてある銃剣を青年へと向ける。

それを僅かに目を細めて見つめる青年。数秒後、両腕に白銀のナイフを構えてヴァイロンを睨み付ける。

六英雄にも似た威圧感。数え切れない地獄を潜り抜けてきた歴戦の戦士。その視線を受けてもヴァイロンは無言で銃剣を突きつけている。

「……クソツ、ココノエめ。全部知ってましたって事か……今度あったら天パにしてやる。あの化け猫め。けどまあ、今は分が悪いかな？ ヴァイロンは遊んで勝てるほど甘くないしね」

「んだとテメエは。まさか逃げるって言う訳じゃねえよな？」

「逃げる？ ハッ、ご冗談を。生憎一度も逃走したことが無いのがウリなんだ。そんな訳で」

ナイフを投げる。片足を軸にし、全身に捻りを利かせて。重心を安定させ、筋肉の運動量を一片も逃さず溜め込む。そして、その爆発寸前な力を放つ。

流れるように投げる投げる投げる。だが、その軌跡はわずかにズレていて、ヴァイロンにあたる気配は無い。だが、二十を超えた辺りから青年は体を止めた。

ナイフはヴァイロンの周辺に突き刺さり、そこだけ孤立していたかのようになっていた。

「あ？ 当たらねえぞ？」

「まあね。ってか、そもそも当てることが目的じゃないし」

そういつて、青年は蛇のように口の端を吊り上げる。その後、赤

い光がヴァイロンの視界を埋め尽くした。それから僅かに遅れて、ナイフが爆発する爆音が響く。砂煙が舞い、視界が完璧に塞がれる。更に、爆音によって、耳もほとんど麻痺してしまっていた。

（クソッ！！　これが狙いかッ！！）

「君の相手はかったるいから。それじゃあね」

「待てッ！！」

「嫌だな。待てって言われて待ったらこの世に泥棒なんてただの一人も存在しないと思うよ？」

青年は気の抜けた声でまるでおちよくするようにヴァイロンへと話しかける。だが、それは会話とは呼べない一方的なものだったが。

「——ッ！！！！！」

その青年の背後から、ノエルが飛び出す。咄嗟の行動だった為か、銃撃による奇襲ではなく体の骨を破壊してそのまま戦闘不能にさせる為の打撃を選択していた。

ノエルは助走をつけたまま両腕に持つヴェルヴェルクを青年の丁度脇腹の辺りに思いっきり振りぬいた。

「よつと」

それを青年はまるで余地していたかのように軽く跳躍して回避する。そして、振りぬいたヴェルヴェルクに両足を置いて着地すると、ニッコリと笑いかけた。

「なッ——」

「悪いね」

そして、ノエルの驚愕に染まった顔が青年の方に向いた瞬間に顎に向かって足を思いっきり振りぬいた。つま先で顎を完璧に捕らえたからか、脳震盪が誘発されてノエルの意識が消失する。そして、ボタンと地面へ倒れた。

「さて……土煙が撒かない内に行かないとね」

青年はノエルを丁度お姫様抱っこの姿勢で持ち上げ、そして強化した両足で跳躍。そのままどこかへ跳んでいってしまった。

やがて、土煙が止みヴァイロンだけが取り残される。……そこへ、

奇怪な男が現れた。

色素の抜けきった銀色の髪に、緑色と赤色のオッドアイ。端正な顔立ちもさることながら、その容姿が一番初めに目を引くだろう。黒いインナーの上から赤いコートを見に纏い腰にはまるで斧のような大剣が掛けられている。

だが、その容姿は通常の人間とはあまりにかけ離れていた。

黒い右腕。機械的なフォルムではなく、生物として脈動しているような不規則なフォルム。その姿はこの世の理を乱しているようにも見える。なぜなら、その右腕からは禍々しい闇が漏れ出していたからだ。

丁度手の甲には赤い球体がはめ込まれていて、その中心には黒い目のようなものが取り付けられている。

その姿は一度見た者ならば絶対に見間違えはしないだろう。最高賞金額を持つ賞金首であり、“死神”の異名を持った歩く災厄……。ラグナ・ザ・ブラッドエッジの姿を。

カグツチ（中）（後書き）

……俺、全然だめだな。

後、今回の展開はかなり駆け足だったと感じましたね。気をつけなければ……。

ノエルのオプティックバレルの性能ですが、格闘ゲーム補正を抜いたらこれ位余裕じゃないでしょうか？ 仮にもアークエネミーでありますので。

途中の連射はノエルのAHをイメージしました。起爆を統一するのではなく、ただひたすらにフルボッコですけどねw

カグツチ（下）

「お前は……」

初め、ヴァイロンは思考を凍結させてしまった。

目の前の男の放つ圧倒的な威圧感。見る者を例外なく恐怖に落とし入れ、絶対の死を覚悟させる殺気。

青年にも確かに常識外れの恐怖を感じた。ヴァイロンが初めて青年を見た際に、抱いた感情は恐怖だった。けれど、それは死への恐怖ではない。自分自身が理解出来ない物に対する恐怖……。人知を超えた、世界とは異なる異物に対する感覚だ。

だが、ラグナに感じた恐怖は違う。絶対的な死の象徴。間違いなく殺される……。ヴァイロンはまさにそう感じたのだ。

青年が蛇のように狡猾だとするならば、目の前の男はさながら獅子のようだ。ただ獲物を刈る為だけに走り、喰らい尽くす百獣の王。銀色の髪は血に染まり、白い肌は赤く上気し。口元に付いた腸を気にせずに喰らい、尚も獲物を求めて彷徨う。そんなイメージを、ヴァイロンは一瞬思い浮かべた。

ヴァイロンが動揺している中で、ラグナはやや焦っていた。

レイチエル・アルカード。吸血鬼の中でも貴族であり、姫としての風格を兼ね備えた圧倒的な存在。まだ幼さの残る顔立ちながらも、常に余裕の笑みを見せる姿は見た目とはとても不釣り合いだ。

そんな彼女から、ラグナは警告を受けていた。

『ノエル・ヴァーミリオンから目を離してはならない』、と。その警告を受けて、急いで駆けつけてみれば既に遅かった。なぜ誘拐されたのかは不明だが、誘拐をする以上は何かしらの意味がある。

テルミが絡んでいる。レイチエルはそう言っていた。だが、先ほどノエルを連れ去った人物はラグナの知っている人物ではなかった。新しいテルミの仲間なのか。それとも――。

「まったく、面倒な事になったな……」

ラグナは知らずの内の毒づいていた。ここでそんな事を言っても時間の無駄だと理解していても、眩かすにはいられなかった。

その言葉を聞き、ヴァイロンはハツとしたように顔を上げる。そして、目の前の人物が誰なのかを確認しようと思った。

「お前……まさか、ラグナ・ザ・ブラッドエッジか？」

「あ？　そういうお前こそ誰だよ」

「俺はヴァイロン。ヴァイロン・ザ・シャイニングガンナー。最強の咎追いって呼ばれてる」

ラグナは自分に似ている。ヴァイロンはそう感じた。どこかきだるげな目線も、ぶつきらばうな態度も、どこか優しさが見えそうな心も。だが、この二人は決定的に違う。

統制機構に反逆する獅子と、統制機構に従う餓狼。不思議と、そんな例えが浮かんだ。

「そいつは難儀なこった。んじゃ、そういうことで」

「おい！！　どこに行くんだよ！？」

「ああ？　さつき拉致られた馬鹿ヤロウを助けに行くんだよ」

ラグナは当たり前だといわんばかりの視線で答える。だが、ヴァイロンは一瞬戸惑った。

……勝てるのだろうか？　あの化け物に。

あれは人間とは呼べない。自分も確かに圧倒的な力を持ち、巷ではそれなりに恐れられさえもしていた。だが、あの青年は違った。体の半身を失っても、平然と再生する程の術式。医療系等では最早破格とさえ思える。

そして、高い戦闘能力。ノエルが扱うヴェルヴェルクは、使用者の精神を安定させる。結果、ノエルはまるで機械のように体を動かす事が出来ているのだ。殺人を芸術にまで昇華させ、恐るべき力であるアークエネミーを前にしてもあの青年は笑顔を浮かべながら戦っていた。そして、傍から見れば軽々と勝利してみせた。

けれど、だからと言っていかに訳には行かないとヴァイロンは悩む。あの青年は自分をここに呼び込んだ。ならば、呼ばれた理由

を探さなければならぬ。

「なら、俺も行く」

「おいおい。どうしてテメエが？」

「……あの男に俺は呼ばれたんだ。真相を知りたかったら来いって」

「そもそも、アイツは誰だよ」

「わからない。ただ——アイツを生かしておくのは不味い」

心の中にあつた違和感。不思議と感じた敵意。その正体を、ヴァイロンは知らずにいる。だが、本能が叫んでいた。

殺せ、と。

濃密な死の気配を纏った二頭の蛇が獲物を掛けて睨み合っていた。緑色の髪に紳士帽を、被り漆黒のスーツに袖を通す男。目元は深めに被られた帽子であまりわからないが、口元は薄く相手を挑発するように開かれていた。

もう一人はあの青年。両腕に二刀一対のナイフ……いや、それをナイフと呼ぶにはあまりにも大きすぎる。例えるなら、生きたままの牛を切断するのに使うような巨大なナイフ。それは最早ナイフではなく、剣として存在している。

その剣を両腕に構え、青年は牽制するかのように視線を飛ばす。

「それで、何やってるの？ カズマ君」

「……今は、ハザマですよ」

「それじゃあ、ユウキ君」

「……だから今はハザマですって」

ハザマはため息を一つ吐き、やれやれといった風に頭を横に振った。

一方の青年は顎に手を、考えるようにうんうんと唸っている。

「面倒だな。じゃあ、ユツキー」カズマ君でいい？　なんか本名っぽいじゃん。うん」

「だーからハザマですって言うてんだろ？　がよおイイイイイイザナギちゃあああんよおおおお！！！」

先ほど纏っていた空気から一変し、逆上した獣のように声を上げる。爬虫類を彷彿とさせる黄色の目で、青年を睨み付ける。

青年は、それを待ち望んでいたとばかりに笑顔で受け止めた。そして、一度ため息を吐いた。

「テメエはあんまし調子乗ってんとマジでブツ殺すぞー！」

「いや、別にいいよ？　俺は別に生への渴望がある訳じゃないし。まあ、別に自殺志願者じゃないんだけどね。後、君位が俺を殺せるとかあんまり調子に乗らないほうがいいと思うんだけど。……もしかして、余計なお世話だった？　俺よりも弱いつてわかってるっぽいし」

瞬間、ハザマは動いた。虚空より出現した緑色の蛇頭が牙をむいて青年の胸を喰らおうと猛進する。

アークエネミーの内の一つであり、六英雄であるユウキ「テルミ」が持つ力。蛇双・ウロボロス。対象の精神を破壊し、空間と言う概念に喰らい付く蛇神。

蛇神の牙を左腕に持つ剣で弾く。遠距離から飛んできたにも関わらず、そのスピードと威力は並の近接戦闘では味わえないほど重い。青年は腕力を強化し、迎撃に当たったのにも関わらずに剣は腕の中から弾かれてしまった。

姿勢を治す暇も無く、次の瞬間には蛇をかたどったような影が襲い来る。

それを今度は右腕に持った剣で薙ぐと、ハザマに向かって走り出した。だが、不安定な上体を無理やり転ばないように維持し、あまり加速ができない状態は敵から見るとただの的に過ぎない。

ならば――。

右腕に持つ剣を破棄し、新たな武器を創造する。赤と藍が混ざり

合い、混沌を彷彿とさせる黒い塊が武器の形状を形取る。

持ち手が非常に長く、黒い棒のようにも見える。その棒の先には、魂を奪い取る藍の力を示すかのように先程作成された剣が取り付けられていた。それを表すのなら、無心で作った不恰好な薙刀。

それをまるで演舞のように軽やかに振るい、緑色の影と蛇頭を弾き、薙ぎ、切り裂く。

リーチが長い武器ならば、受け止める事は一先ず置いておいても攻撃を起動を逸らす事が出来るからだ。だが、元々術式によって編まれた武器では通常よりも強度が劣る更に、相手はアーケエネミーだ。故に、傷所ではなく先端のナイフは欠け、棒状の部分は抉り取られている。

青年は一度足を止めて姿勢を正す。そして、両手手に持った薙刀を破棄し、ハザマとの距離を測る。

……やはり遠い。恐らくは十五メートル程あるだろう。しかも、ハザマのウロボロスにあるもう一つの効果が非常に厄介だった。空間に噛み付き、そこから更にトリッキーに移動する。ならば、近づいても厄介な事には変わらない。

遠距離射撃に徹するのもいいが、相手は腐っても六英雄。そんな細かな細工に意味は無い。

ならば——強行突破だ。

「所で、ハザマ……だったっけ？ 俺、自慢じゃないけど六英雄の技を結構使えるんだよね」

「ああ！？ ……つつか、そんな所で休んでんじゃねえぞ！！」

身を切り裂くような怒声が耳を穿つ。音の振動と共鳴するかのように、緑色の蛇の影と蛇神が槍のように突き進む。

青年は構えない。迎撃する様子も見せずに、ただ下を向いて笑う。青年はなれない術式を作成。そして、空間を捕捉し——捕らえる。

「……蛟竜裂華斬！！ ってね」
みずちれつかざん

藍色の円がハザマの周りに浮遊し、一気に収束する。それは、一つの拘束陣だ。かつて、六英雄の一人であるユウキィテルミが用い

た術式。その効力を誰よりも知る者は、当然使用者に他ならない。

結果、ハザマの行動は全て不可能となる。そして、拘束されたハザマに向かって強化した脚を用いて駆け出す。誰よりも早く、何よりも早く。万物としての法則と、森羅万象の理すらも振り切り加速する。

「まあ、君みたいに上手に使えるかどうかはわからないんだ。だから、採点をお願いするよッ!!」

そして、藍色に染まった二つのナイフを構えてXを描くように斬撃を放った。

……だが、ハザマは笑う。まるで、もう為す事が既に終わっていると言わんばかりに唇を吊り上げていた。

それに気がついたのは、斬撃を放った後だった。藍色のナイフは、まるで空気を切り裂くように手ごたえ無く、ハザマをすり抜ける。

赤い液体は飛び散らない。青年は驚いたように目を見開き、切り裂いた後の姿勢で無理やり後ろを向く。

無理に体を回転させたから、上体が大きく横に反れる。それでも、認識できた。

——ノエル!! ヴァーミリオンが居ない。その事実を。

カグツチ（下）（後書き）

久しぶりですね。

お待たせした割には短いですね。前回と同じ感じになりそうだ。

取り合えず、GW中には更新したいですね。書きたいシーンもありますし。

二つのアオ。そして、一つの希望（前）（前書き）

今回は、ちょっと強さがインフレしています。

最強系を語る訳じゃありませんが、描写が被ってるなどお見苦しい点があるかもしれません。

二つのアオ。そして、一つの希望（前）

「やられた……ね」

考えてみれば、さも当然のことだった。ハザマの目的はノエル^{II}ヴァーミリオンの奪取にある。ならば、初めから戦闘をする必要性など無かったのだ。

そもそも、その戦闘を生み出してしまったのは自分だ。自分の中にある感情。自分が自分たる何かを表しているようなドス黒い殺意。その突発的な衝動に身を任せた結果が、このザマだ。ハザマに敵意を抱かせるのには成功したが、結果的には失敗だった。何がいけなかったのだろうと、一度思い返す。

思い返してみても、あの怒りからは殺意を感じた。ここで終わらせると、強い意志を感じた。にもかかわらずに、冷静に対処していた。その事に、一点の疑問すら沸かなかった。

……これが蛇。人を騙し、裏切り、心を揺さぶってきた太古からの存在。

なんて狡猾な思考回路。その精神は、六英雄に最も相応しく無いといわれるのも納得できる。

だが、これは間違いなく青年のミスだった。青年がここで戦闘を破棄していれば――。

そこまで考えて、思考を凍結させる。恐らく、戦闘は避けられなかっただろう。それはなぜか。答えは簡単だ。

幾ら青年といえども“自分自身を抑える事は出来ない”。

「……俺も、まだまだ青いね。そう思わないかい？ ……」『ヤタガラス』」

苦虫を噛み潰したように投げかけられた声に返す者は、その場に誰一人として存在していなかった。だが、青年はまるでそこに何かがあると確信しているように虚空を睨み付ける。……そして、空間が歪む。

稀代の大魔法。それは、空間転移の魔法と酷似していた。否、その物と言っても過言ではない。

ゆつくりと、“闇”を纏いながら現れた存在はただひたすらに黒く、光を通さない。

だが、考えても見て欲しい。色とは、光の反射によって生まれる情報だ。ならば、光すら届かない闇を色と呼べるのだろうか？

…その疑問に否と答えるように、周囲の光を奪い取りながらも存在している闇色の物体は静かにその全身を露わにした。

闇色の羽。カラスのようにも見えるが、その羽の大きさは青年の扱っていた薙刀の刃と同等か、もしくはそれ以上に見える。

その翼は一对に生えていて、屍を喰らうのではなく自ら屍を生み出しその腸を喰らうカラスのイメージを彷彿させた。

胴体はさながら洗練されたナイフ。翼に不釣り合いで、酷く不恰好だった。だが、そのフォルムは洗練された刃。見た目を捨て、ただ殺すことに特化した無骨な殺意。

足は鳥と同じように生えているが、同じく闇色。そして、従来の生物と大きく異なり三つの指しか生えていなかった。

異質な空気。別世界の平気が紛れ込んできたのではないかと、錯覚に囚われそうになる。だが、それは違う。

見た目こそ不恰好だが、羽が異常に肥大化していて足の指が三本と言っだけの魔物。それは、魔素の影響を受けた被害者とも考えられる。だが……そう考えた上で、“異質”なのだ。この存在は。

「ねえねえヤタガラス。そこまで無視するのは悲しいんだけど……」

「勘違いしないでください。答えなかった理由は、私の知る所では無いからです。他意があつた訳ではありません」

エコーの掛かった声。その声は、ノエルの声質に僅かながら似ているように思える。だが、原型を留めない程にぐちゃぐちゃにされた声はおよそ人間の物とは思えない。

「うん。別に事務的な対応を期待してた訳じゃないんだけどね」
力無く笑いながら、僅かに下を向く。少しすると、方をがっくし

と肩を落とし大きなため息を吐いた。

「アマテラスに殺される……」

「お言葉ですが、それはありませんよ。主は初めからあなたなんかに期待してはいませんので」

「いや、そういうのハッキリ言わないでくれる？ モチベーションって結構大事なんだから。まあ、ストックなんて幾らでもいるんだろうけど。今は、ただ単に俺が一番強いってだけだし」

「そうですね。……おや？」

青年は何か、と口を出す前に顔を僅かに顰^{しか}める。

嗅ぎ慣れた匂い。濃密な死の気配。僅かに感じる忌まわしき獣の残骸。姿形は見えなくとも、体が叫ぶ。本능が警告の鐘を鳴らす。自らとは相容れぬ存在であり、確立事象の始まり。

「……あれ？ 匂うね。ところで、『犬』を出し抜けるとでも思ったのかい？ ——ヴァイロン。それに、ラグナ・ザⅡブラッドエツジ」

再び、空間が歪んだ。

だが、それは空間転移を示す物ではない。かなりの高難易度を誇る認識障害の術式。それをを用いて、姿を隠していた人物が現れたのだ。

現れたのは、死神の異名を持った最高額の賞金首。ラグナ・ザⅡブラッドエツジ。

そして、最高の咎追いにして、閃光の射手の異名を持つヴァイロン・ザ・シャイニングガンナー。

その二人は恐らく、青年以外の誰かだったら見つけるのは困難だった筈だ。気配も、足音も、匂いも、姿も。全てを隠し、偽り尽くしていた。場合が場合であれば、機械でさえ偽れるだろう。

だが、相手は人型を保っただけのナニかだ。

「……ノエルは？」

ラグナが疑うように声を上げる。場合によっては戦闘も否めない
と、無言で警告していた。その証拠に、腰に掛けてある大剣に右腕
を伸ばしている。

青年はそれを観察するように、薄く笑いながらラグナを見つめる。
だが、数秒もすると両手を挙げてため息を吐いた。

「降参降参、だから止めてよ」

それだけ言うと、手を下ろしラグナの方へと歩いていく。

「残念だけど一足遅かったね。ああ——そんな目で見ないでよ。今
回は久しぶりに反省しているんだ」

「お前。なんで……ッ!!」

「あれ？ 知らないの？ ノエル「ヴァーミリオン」は死なない。『
蒼』を継承してしまってる以上、あれは最早人間じゃない。膨大な
力を入れる為の借り物に過ぎないんだ。そんなとつても危険で、と
つても強い力を野放しにする訳にはいかないでしょ？ だから——
俺が回収する」

青年は右腕に銀色に輝く刀身を持ったナイフを作成すると、それ
をラグナ達の方へと向ける。

殺意が膨張し、空気がキリキリと悲鳴を上げる。体中が恐れをな
し、このまま背を向けて逃げたいという感情がヴァイロンの心を埋
め尽くす。

青年からは表情が消え失せ、機械のような視線が問い掛ける。
……邪魔をするのか？ と。

「そうはいかねえな。アイツには色々と言いてえことがあんだ。そ
れと、一つ忠告しとつけど——俺の邪魔をするならブツ殺す」

声を出せないヴァイロンの隣で、ラグナが大剣を振りぬき答える。
切っ先を青年に向けて、殺意を込めた視線が機械の体を射抜く。

——空気が脈動する。絶対の力を持った存在に恐れをなし、怯え
る。怯えに怯え、硬直しきった空気を破壊したのは青年の一撃だっ
た。

右腕に持ったナイフに捻りを効かせ、筋力運動の到達点にまで達した運動量を乗せて投擲する。

赤い流星と化した銀色のナイフがラグナめがけで突き進む。ラグナはそれを右腕に構える大剣でなんなく弾き返すと、青年の方を睨み付ける。

一方の青年は大きくバックステップして、闇色の存在の隣に佇んでいた。そして、色の無かった機械に激情が宿った。

「——ヤタガラス。行くよ」

「了承されました。……コードを」

そこまで聞いて、ラグナの表情が驚愕に染まる。

圧倒的な存在。生物の理から外れた何か。無機物か有機物かの判断がつかないフォルム。

その、ありえない存在の説明がようやくつく。なんて事はない。

あの存在は生み出されたのだ。常識の理を超え、輪廻をも否定する窯の中から。

「なっ！？ お前の隣のそれは……まさか、アーク・エネミーかつ！？」

「なんだとッ！？」

ヴァイロンが叫ぶ。そして、自身も腰に掛けている大型の銃のフォルムをした剣を取り出すと、自身の力の解放を示す言霊を吐き出す。

「第六六六キサナ機関解放、次元干渉虚数方陣展開！！」

その言霊に従い、ヴァイロンが持つ銃剣が大きくそのフォルムを変えていく。銃の横に取り付けられたX型の突起物が、金色の光を放ちながら展開される。

突起物の中から現れたのは黄金の閃光。全ての絶望を蹂躪し、世界に無条件で希望を顕現させる可能性の否定。

コードエックス
「魔道書X……起動！！」

刹那、波状と化した光が全てを埋め尽くす。視界が黄金色に染まり、意味を失う。辛うじて機能している耳に聞こえるのは何かが渦

巻く音。それは、希望に脅かされた絶望の悲鳴にも聞こえた。

「起動しろ……アーク・エネミー、ヤタガラスッ!!」

黄金色の世界が、色を取り戻し、もといた世界へと回歸する。その狭間で、青年の隣にいた闇色の存在が変形するのが見えた。

巨大な一对の羽は、そのままに。胴体は消え失せ、獲物を刈る為の本来のフォルムへと変化した。

即ち、二刀一对の双剣。光を通さない闇色のフォルムは、黄金の光に毒される事無くそこにあった。それが、さも当然と言わんばかりに。

「……なんだよこりゃあ。つまり、俺も戦えつてか？」

ラグナは右腕に持った大剣を大きく持ち上げ、地面へと突き刺した。その衝撃でひび割れた地面を見る事なく自身の右腕を奇怪な左腕に添える。

それは、腕と言うよりは機械。機械と呼ぶよりかは無機物。そんな例えが浮かぶような造形をしていた。

青年の持つ二刀一对の双剣……ヤタガラスにも似た、光を通さない闇色の腕。それが元々人間に備わっていない事を強調するかのように、手の甲には赤い球体のような物が取り付けられている。

「第六六拘束機関、次元干渉虚数方陣展開……」

ゴゴゴゴゴゴ、と大地が音を立てながら震える。それは、新たな支配者に畏怖の感情を抱いた民のようだ。

青年はその光景を陰しい表情で見つめていた。だが、やがて大きくため息を吐いた。

「よく見とけ。これが『蒼』の魔道書だッ!!」

……起動ッ……!!」

闇が世界を侵食する。ありとあらゆる生命が震え、恐怖が新たな秩序を成立させる。だが、そのちっぽけな闇を破壊するように青年が口を開く。

「ふん。原初のアオの魔道書って、こんなもんなんだ」

「何だと……!!」

「まあ、どうでもいいか。えつと確か……こうだよな」

そう言いながら、両腕に構えたヤタガラスを一度地面に突き刺すと、先ほどのラグナのように右腕を左腕に添える。

「第六六拘束機関開放。次元干渉虚数方陣展開——アークエネミ

ー・ヤタガラス付属」
エンチャント

「付属……ッ！？」

——崩れる。常識が、非常識を巻き添えにして崩壊する。空が、大地を巻き込んで滅びる。星が、宇宙を巻き込んで朽ちる。

全ての生命を蹂躪し、刈り取る死神の鎌。命を奪う『蒼』の化身たる『アオ』の魔道書。
プレイフル

本来なら、世界に一つしかない筈のその力を青年は——だれよりも巧に扱う。
へた

「ヒヤアアアアアッハハハハハハ！！！！！！ 見せてあげるよ、これが紛い物以下の『アオ』の力だよッッッ！！！！」
ブルー
の魔道書、起動ッ！！」

ラグナの闇が。ヴァイロンの光が。音を立てながら消えていく。否、その表現は間違いではない。あまりに強烈過ぎる概念の塊が、希望を押し潰したのだ。

目の前に立ちふさがる事が愚かと感じる前に、視界に入るのが惨めとすら感じる。そんな、強大な王。

その王を前にして、ヴァイロンとラグナは自身の足が揺れている事に気づく。それは、理性ではなく、生存本能が訴える死の気配。

死神の鎌が、既に首元まで来ている事を知らせる鐘のように。或いは、終末を告げる天使達が必死に吹くラッパのように。

それは、即ち……死刑宣告。

「遊んであげるよ、子犬ちゃああああああああんんんッッッ！！」

王の前に立ち竦む哀れな二人は——ただ、お互いの力を信じる他無かった。

二つのアオ。そして、一つの希望（前）（後書き）

昨日の段階で出来てましたが、誤字脱字をチェックして投稿。それでも、もしあつたらすいません。

そして、謝罪を。

次回の戦闘では、独自解釈が大量に含まれて居ます。ブレイブルーへの付属とは何か？ そもそも青年の正体はなんなのか？ ヤタガラスとはなんなのか？

納得のいく説明が出来るように頑張りますので、よろしければ時話も見てやってください。

それと、トッシーさんに。

キャラをお借りしている以上、出来るだけ五分五分を心がけていますが、本気を出した作者の主人公とでは差が出来てしまいます。なので、とある場面までは力が均衡する事はありません。

ですが、そこへ行けば同じくらいになる予定ですので、今回みたいな件は許してください……。

にしても、まさか一日で書き終わるとは。休みの日様様ですね。次回の更新はやっぱり未定。GW中に一回位は更新したいですね。それでは。

二つのアオ。そして、一つの希望（後）（前書き）

今回読んでいて疲れると思います。スピード重視というか、密度の高い戦闘をしていますので。まあ、悪い意味ではないのですがね…。

二つのアオ。そして、一つの希望（後）

絶望を纏いし支配者が叫ぶ。世界が怯え、収縮する。

対する闇を纏いし死神と、閃光を纏いし射手はどちらとも言わずに駆け出した。

人外の速さ。それが術式による強化によるものであっても、その速さは度が過ぎていた。現に先ほどまで数十メートルとあった距離が一瞬で一メートルまでとなっていた。支配者へと変貌した存在に、死神が前へと躍り出る。

燃え上がる殺意。煉獄の業火を彷彿させる死神の剣が、支配者の喉下を挟む。

赤き血。目の前にいるモノが生物である事を示すように血液が舞う。だが、支配者は倒れない。人間で言うのならリンパを切られたようなもの。にも関わらずにその表情にあるのは狂乱の笑み。

破壊的な笑みに宿るのは狂気。激情を孕んだその視線は死神の喉元を射抜いていた。

死神は一瞬顔を青ざめ、距離を取る。刹那、黒き翼が虚空を裂く。そこは奇しくもつい先ほどまで死神がいた地点であった。

つまり、突如として襲われた悪寒に身を任せずに居たのなら死神は皮肉にも死を与えられていたのだ。そこまで来て死神は確信する。目の前の存在が支配者たるモノである事に。

死神が距離をとったのを合図に、射手が閃光を打ち出す。黄金の光は闇を切り裂き支配者を貫こうと猛進する。

対する支配者は闇を纏った赤き光を打ち出す。空気が震動し、この世の物とは思えない轟音が轟く。

均衡は一瞬。黄金色の希望と藍色の絶望は互いを打ち消しあい、虚空の歪へと消え失せる。

その瞬間には支配者は走り出していた。両手に持つのは黒き一對の翼。それを死神と射手のそれぞれに投擲し、両腕に闇に侵された

ナイフを握る。

死神は右腕に持つ大剣で黒き翼を弾き、射手は両手に握る巨大な銃剣で黒き翼を弾いた。だが、その衝撃を完全に受けきることが出来ずに体制を崩してしまふ。

支配者はその隙を突くかのように更に速さを上げる。瞼を一度閉じれば、その分だけ支配者の位置はめぐるましく変化していた。その姿を補足できぬまま、気がつけば支配者は射手の目の前に居た。

射手は悪寒を感じたが、回避行動に移る事は出来なかった。弾いた際の衝撃で崩れた姿勢では、回避行動をすれば次の瞬間には命を略奪されると直感したからだ。故に、次なる衝撃に耐えるべく姿勢を正して武器を構える。

重心と体重を最大限に乗せ、全身の筋肉を行使する。それは一つの芸術。肉体のバネを極限にまで引き伸ばした一撃。槍兵が気合一線で放つような一撃は、射手の持つ巨大な銃剣へと叩きつけられた。射手の体が宙に浮かぶ。両腕に銃剣を横に持ち、完全に受け止める姿勢をとったにも関わらずに暴力的な運動は留まることを知らないと言わんばかりに射手を上空へと跳ね飛ばす。

支配者は一撃を放った後には既に予測していたと言わんばかりに跳躍。そして、未だ銃剣を構えたままの射手に両足を乗せる。そして、それを足場として更に跳躍。

足場とされた射手は、行き場を失った力によって地面へと叩きつけられる。大地が砕け、肉体が陥没するのを遅れて感じた。

だが、そこで悠長に休んでいる場合では無い。射手は全身を襲う痛みに耐えながらも自身が置かれている状況に気が付いた。

思考する時間は一秒とて無い。だが、その行動は迅速にして精密。恥も全て捨て、ただひたすらに自身が寝そべっているクレーターから抜け出す。

その次の瞬間には黒き雨。まるで滝のようにナイフが地面へとなだれ込んでいた。

「でりゃあああああああああ!!!!!!」

死に物狂いで走って絶望の雨から逃げる。そこでハツと思い出したように上空を見上げた。見れば、赤きコートを着た死神が支配者へと一撃を繰り出そうとしていた。

更に上昇する威圧感。空気が熱を持ち、この場にいる者達を焼き尽くさんと燃え上がる。

死神と射手は武器を構え直す。その視線は怯むどころか鋭さを増していた。

「ハハハハハハ！……！！！！」　今は良かったよ！！　即席コ
ンビにしては上出来じゃないのかなあ！？　それじゃあ、今度はこ
っちの番だよ！！」

だが、死神と射手は怯まない。自身らも膨大な力を爆発させて支配者へと挑む。

そして、両者は交差する。均衡は一瞬。闇と希望がぶつかり合い、空気が振動する。そして再び距離を取り、一撃一撃が必殺の威力を持った攻撃を放って行く。

確かに、目の前には“死”がある。だが、自らの再生能力を考えれば大したことはない。だとするならば、関心が向く点は全く別の所だった。

52

裏に言葉が浮かぶ。

——やはり、こうなるのなら四肢を切断して境界にでも閉じ込めて置けばよかった。そうすればもつと簡単に終わっていたはずだ。そんな考えを振り払うように、支配者は笑う。それは自嘲なのか諦観なのか。誰にもわからないほどの狂気に包まれながら。

「——観測^みえた」

攻撃が交差する中、支配者は呟いた。死神が後方へと距離をとった瞬間を見計らって赤光を放つ。爆音と共に射手に向かって、先ほど赤光を放ったほうの腕で闇色のナイフを投擲する。

死の気配を纏った赤き閃光を死神はその場で体の重心をずらして回避行動へと移る。だが、走っている状態から無理に重心を動かした結果姿勢が僅かに崩れてしまっていた。それは即ち、丸腰の状態。一方で支配者は藍色の流星を黄金の閃光で貫くと、支配者に向けて銃身を向ける。一瞬で光が収縮し、限界まで張り詰めた光線が支配者を襲う。だが、支配者は回避行動を取ろうとはしなかった。

支配者は僅かに跳躍すると、空中で巨大な刃を製造した。例えるならそれは、巨大なテーブルナイフ。だが、その大きさは通常のテーブルナイフとは大きくかけ離れていた。五メートルはあろうかと言う巨大な刃を自らの真下へと渾身の力を込めて投擲した。地面に巨大なナイフが突き刺さった瞬間、それを待っていたと言わんばかりに黄金の閃光が貫く。だが、そこにフェウスの姿は無かった。

フェウスは巨大な刃の柄の部分足を足場にして降り立つと、未だ体制の崩れた死神の前へと闇色のナイフを。そして、黒き翼の片割れを構えながらも空いている方の腕の中でナイフを作成。そして、黒き翼の片割れを死神に向けて投擲した。その後一秒とたたずに自分の真下へと先ほど作成したナイフを投擲する。

そして、あるうことかフェウスは空中を駆けた。だがそのタネは数秒で理解される。先ほどフェウスが投げたナイフの柄の部分に取り付けられたワイヤー。地面へと突き刺さった二つのナイフの柄の

部分は、黄昏の光を反射するワイヤーによって結ばれていたのだ。

そして、死神は手に持った大剣で黒き翼を受け止める。

金属音と遅れてやってくる衝撃。その衝撃に腕を痺れさせながらも黒き翼を弾き返す。再び金属音を奏で、黒き翼は吹き飛ばされた。そして、突如として開かれた視界に写るは黒いナイフを空いた片腕に握る支配者の姿。

射手が一瞬見失った支配者へと閃光を打ち出すが、それも僅かに遅かった。支配者はそのまま片腕に握られたナイフを死神に向けて振るう。死神はそれを必死に大剣で防ごうと構えた。だが、やってくる衝撃は僅かではなかった。

終わった——射手は勝利を確信した。だが、支配者はそこで留まらない。あろう事か支配者が構えた大剣を両足で蹴飛ばし、更に滞空する。結果、標的を失った黄金の閃光が先ほどまで支配者のいた地点を通り過ぎるのを見た瞬間、両腕の指と指の狭間に製造した黒きナイフを死神と射手のいた地点へと投擲する。

刹那、藍色の流星は大地毎死神と支配者を穿つ。地表にぶつかる、と、地面が陥没した音と爆発音が轟く。土煙が視界を遮った。だが、支配者は投げ終わった後にも投擲の構えを解かない。

片腕を振るった後は、もう片方の腕を。そのもう片方の腕を振るつてる途中に再び四本のナイフを製造すると先ほどの映像の繰り返しのように再び投擲する。

そこまで来て、突如として支配者はどこか不満気に表情を歪ませる。

「……最悪だね。逃がしちゃったよ」

僅かに投げる速度を遅めたナイフを地面へと投擲し、その際に起きた衝撃で土煙を吹き飛ばす。そこには、先ほどまでいた射手と死神の姿は見当たらなかった。

——逃げられた。そこまで来て、支配者は唇を噛み締める。不覚にも、今回の勝負は引き分けで終わってしまったからだ。

漆黒の夜空。星が瞬き、月の光が町並みを照らす。町は光を放ちながらも、一つ。また一つと消えていく。

あまりにも幻想的な光景。町が放つ光は、闇の中で必死に終わらせまいと光が足掻くようにも見えた。

その世界を男が見下ろす。

輝かない闇色の金。それは闇。全ての呑み込むが如き混沌。その混沌を眼窩にはめ込んだような瞳。

全身は闇に紛れる黒きスーツ。それに反比例するかのように肌は白く、緑色の髪は風が吹く度に揺らめく。

「それにしても……やれやれ。面倒でしたよ。まったく」

「……ッ!!」

「おお〜っと。逃がしませんよ？ それにしても、あなたの愛しのナイト様は一体どこへいったのでしょうか？ ノエル「ヴァーミリオン」少尉」

「ハザマ大尉……あなたは一体何をするつもりなんですか？」

銀色の鎖で全身をミイラのように包まれたノエルは弱々しい声で呟く。その顔は不健全に青白く、体の一部には赤く腫れ上がっている所や血が出ている部分がある。

まるで月に備えられた生贄のようだ。

「そうですね〜……私はただ、“嘘”を吐く人が嫌いなだけですよ」
月の更に先……計り知れないようなどこか遠くを見ながらハザマは呟く。

黄金の闇は白き光に侵されながらもしっかりと月を見つめていた。自身は揺るがないと絶対の意思を見せ付けるかのように。

「さて、と。申し訳ございませんが、付き合って貰いますよ。ノエル「ヴァーミリオン」……いえ、十二番目のお人形さん」

金色の闇が吼える。それは災厄の引き金を引く音のようにも聞こえた。

「――観測^みえたんだけどな。一瞬思考が止まったなんて我ながら恥ずかしい話だね」

何かが俺に干渉してきてるのかな……イレギュラー考えるとするならあのタカマガハラ達だろうけど、俺みたいな無名の役者は野放しに出来ないって事かな。まあ、確定してないんだからわからないか」

場所は変わり、暗雲の夜。月は翳り、闇が世界を支配する。辺りにあるのは恐怖の森だけ。その森も、今はひっそりと息を潜めている。

心地よい静寂。虫の音一つとして無いのはここが魔素に毒された地であるからだ。事実、ここら一帯で見る事の出来る生物は魔素により少なからず変貌している。

通常の人間ではいるだけで悪影響が出る。だが、フェウスは多すぎる酸素のような状態になった魔素を藍の魔道書で標準レベルに下げていた。そうすることで、術式に必要な魔素が補充されて治療術式等が行使出来る。

但し、これは多すぎる酸素の中で行う行為。密度を下げる前にここに入ってしまったら、たちまちその存在は魔素に侵され変異してしまう。そう考えてみるとフェウスのしている行為は無鉄砲であり、自殺志願者のそれとよく似ていた。

「……独り言ですか。気持ちの悪い人ですね。死んだらどうです？」
静寂を破った不釣り合いな機械音声。その音源を目で辿ると、闇の中から浮き出るように現れた存在があった。

闇に溶け込む機械的なフォルム。暗殺に用いる黒塗りの刃を持つ

たナイフを彷彿とさせるシャープな体。

一際目を引くシャープな体つきからは大きく離れた巨大な翼。体の三倍はあろうかと言うアンバランスなその翼は、まるで獲物を切り裂く刃のようだ。現に、その刃のような翼はヴァイロン達との戦闘の際には双剣として機能していた。

闇夜に紛れるその姿はまさに鴉^{カラス}。死体を貪り、時として勝利を約束する悪にして善なる相反する存在。

「死に掛けるのはもうこりごりだから。ごめんね？ でも、俺の存在を塵一つとして残さずに消せるんだったら殺されてもいいよ？」
フェウスは薄く笑いながら答える。その瞳はどこか儚く揺れていた。

「まあ、そんな事はどうでもいいでしょう。それで、私を扱って見た感想は？」

なんてことはない。ヴァイロン達と戦った時、フェウスは初めてこのヤタガラスの力を使ったのだ。その為、戦いの後半からは普段から自分が慣れ親しんだナイフの投擲や赤光による中距離から近距離の戦闘スタイルを知らず知らずの内に取ってしまった。確かに、ヤタガラスの力は大きい。

だが、圧倒的に経験が足りていないとフェウスは実感する。最も、普段から両手にナイフを持っているので接近戦ではその強度もありナイフのよりも肌に合っているとも感じていたのだが。

初めからフェウスが知っていた事は二つ。ヤタガラスの翼から来た双剣による近接戦闘と、ヤタガラス自体の固有能力だ。

「取り合えず一言。使わずら過ぎるんじゃない？ 君」

先ほどの戦闘を思い出したのか、苦虫を噛んだ様に顔を顰める。簡潔に言えば、近接戦闘は構わない。但し、両手が塞がるという事は赤光を使い距離を縮める事が出来ない。その為、必然的に身体強化を用いた脚による空中からの奇襲が多くなってしまった。最も、途中からはヤタガラスを投げて普段どおりのスタイルを取っていたが。

「確かにずさんな戦闘でしたね。途中からは私を投げ捨ててましたし」

「だって邪魔だったし。まあ、許してよ。これからは気をつけるからさ」

「……まあ、いいでしょう。真に『不本意』ですがあなたには主からこき使われるとの命を受けてますので」

『不本意』の所をヤケに強調してヤタガラスは言った。

——以外にも感情があるのだろうか？ この見た感じ機械なメタリック鴉に。フェウスは目の前の存在に対する見方を改める必要があるのだろうかと考えながら答える。

「それじゃあ、俺にコキ使われてね。あ、安心してね？ 俺は基本的に物は壊さない主義なんだ。戦闘以外ではね」

「……い、いいでしょう。上等です。それでは、話を戻しますが——どうでした？ 私の能力は」

隠し切れない動揺を繕うかのように話題を元へ戻す。とはいえ、そもそもこれこそが一番のポイントであった。

ヤタガラスの真なる能力——それは在ってはならない力。『観測』だ。

「天照の遣いヤタガラスの名は伊達や酔狂じゃないんだね。驚いたよ。未来が見えるだなんて」

「より正確に言うのであれば、過去に起きた出来事の観測からの予知ですがね」

過去……タガマガラが起こした過去のループの中から似たような出来事を『観測』し、次の一撃を予想する。だが、先ほどの戦闘のようにあまり起こっていない状況では少し心元無いが。

先ほどの戦闘の場合、フェウスがラグナを攻撃する状況は無かった。故に、それと酷似した状況を観測して投影したのだ。

過去現在とハザマと呼ばれた者との対決。そのイメージを投影した結果、未来は『ああなるのだろう』と言った予測が立てられた。が、正確ではないためあくまでも目安でしか無いのだが。

「十分だよ。それにしても、アマテラス製作の兵装は予想以上に化け物だね。そうは思わない？ ヤタガラス。」

いや——術式兵装、アークエネミー陽双剣・八咫鳥やたがらすの方がいいのかな？」

「どちらでも構いませんよ。名前なんて、他と分ける事さえ出来れば十分なんですから」

「ヤタガラスは冷たいな。もう少し人生を楽しもうよ」

「残念ですが私は人間じゃないので」

「そこまで冷静に突っ込まれると悲しいよ？ 泣いちゃうよ俺。いいの？」

アークエネミー、陽双剣・八咫鳥。アマテラスユニットがナインの用いたアークエネミー製造方法をフェウスに授け、ループの内に無尽蔵の魂を回収したフェウスが作り出した自立支援兼武器型のアークエネミー。その力は、『観測』による過去視によって未来氏視に近いレベルにまで昇華された予知。

勝利を齎もたらす鴉に相応しい能力ではないだろうか。

二つのアオ。そして、一つの希望（後）（後書き）

嘘みたいだろ？俺、昨日までスランプだったんだぜ……？

これが大会補正か（笑）。

個人的には今回感想をくれると泣いて喜びます。久しぶりに今の自分にとってベストな戦闘が出来たので、指摘なり自惚れですが賞賛なりくれると本当に泣きますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2201p/>

ブレイブルー 異伝、確立事象から外れた主人公

2011年6月13日01時10分発行